2021/05/02　七里教会　　最上光宏

「わたしを愛するか」　　ヨハネ福音書 21:15-19

復活されたイエスさまは、3 度にわたって弟子たちにご自身を現わされました。1 度目と 2 度目は、エルサレムの隠れ家に身を潜めていたときでしたが、3 度目は、ペトロをはじめとする 7 人の弟子たちが、ティベリアス湖(ガリラヤ湖)で漁をしていたとき時のことでした。弟子たちは一晩中網を打ち続けましたが、一匹の魚も捕れず虚しく朝を迎えて岸に近づいたとき、イエスさまが岸辺に立っておられて、「舟の右側に網を打ちなさい」と言われたのです。弟子たちには、それが主イエスだとは気づかなかったのですが、言われた通りにしてみると、おびただしい魚の群れが網にかかり、「あれは主だ」と気づき、裸だったペトロは、慌てて上着を着て、湖に飛び込んだのでした。

このペトロの異常な反応は、かつて、この湖で初めてイエスさまと出会った時の驚きと感動と深く結びついていました。その時、ペトロはこの湖の漁師でしたが、この時と同じように一晩中漁をしたけれども、一匹の魚も捕れないという、挫折を体験し落ち込んでいたのです。朝になって、虚しく網を洗っているところに、イエスさまが現れ、「沖へ漕ぎ出し、漁をしなさい」というのです。疲れ果てていたペトロは、「一晩中網を降ろして、何も捕れなかったのです」と言いかけましたが、「お言葉ですから」と、網を降ろしてみると、引き上げることの出来ないほどの魚の群れが網にかかり、ペトロは思わずイエスさまの足もとにひれ伏して、「主よ、わたしから離れてください。わたしは罪深い者です」と告白したのです。そのようなペトロにイエスさまは、「あなたは人間を捕る漁師になるのだ」と言われ、彼は舟も網もすべてを捨てて主に従ったのです。これが、漁師であったペトロが最初にイエスさまと出会い、イエスさまの弟子となったきっかけでした。

イエスさまは、その時と同じような大漁の奇跡を示して、「初心に帰って、あの最初の感動、初めて主と出会った時の喜びと感激とを忘れるな、最初の愛に立ち帰れ」と、諭されたのだと思います。

「人間を捕る漁師」として召されたはずのペトロたちが、いつの間にか、「魚を捕る漁師」に逆戻りして、郷里に帰って虚しく網を打ち続けている。そういう弟子たちをイエスさまは放置しておくことは出来なかったのです。復活された主イエスが、3 度も弟子たちの前に現れ、このような力ある業を行われたのは、「信じない者にならないで信じる者になり、わたしに従いなさい」というイエスさまの愛と配慮によるものでした。

このヨハネ福音書 21 章 9 節以下を見ると、「弟子たちが舟から陸に上がってみると、炭火が起こしてあり、その上に魚がのせてあり、パンもあった」と記されています。何も食べる物がない」という弟子たちのために、イエスさま自らが食べ物を用意して、お腹をすかして帰ってきた弟子たちを迎えたのです。「さあ、来て、朝の食事をしなさい」と。もはや、弟子たちのうち誰一人として、「あなたはどなたですか」と問いただす者はいなかった、記されています。

パンを裂いて弟子たちに渡し、魚をも同じようにされた主イエスの姿に、誰一人、疑う者はなく、「十字架と復活の主は、今も生きて、私たちと共におられる」という確信を

得ることが出来たのです。このパンと魚を裂いて弟子たちに渡すという行為は、イエスさまが食事の時にたびたび行っていた行為で、後の聖餐式を象徴する行為です。今、私たちはコロナの蔓延防止のために、聖餐式を執り行うことが出来ないでおりますが、聖餐式は、十字架と復活の主イエス・キリストが、今もここに共にいてくださる、ということを身近に体験する大切な礼典なのです。その意味でも、一日も早くコロナ禍が収束して、安心して聖餐式の出来る日を、祈りつつ待ち望みたいと願います。

さて、今日の聖書の箇所は、そのイエスさまを囲む食事か終わった時のことです。イエスさまが、やおら弟子のシモン・ペトロに尋ねたのです。「この人たち以上にわたしを愛しているか」と。これは、非常に重い問いだと思います。「わたしを愛しているか」という問いは、普段の日常会話の中では、決して問うたり、問われたりすることのない問いではないでしょうか。戯れに問うような問いではないのです。「愛しているか」という問いは、心から愛しているもののみが問い得る問いであり、その問いそのものが、愛の告白でもあると思います。

ペトロはこのイエスさまの重い問いの前に、「はい、主よ、」と答えつつ、「わたしがあなたを愛していることは、あなたがご存知です」と答えました。どうしてペトロは、「はい」と答えながら、このようなあいまいな言い方をしたのでしょうか？ その背後には、シモン・ペトロの大変苦い失敗の経験があるのです。

それは、イエスさまとの「最後の晩餐」の直後でしたが、イエスさまが弟子たちに「あなたがたは皆わたしにつまずく」というとペトロは「たとえみんながつまずいても、わたしはつまずきません」(マルコ 14:29)と胸を張って応えたことがあったのです。その時、イエスさまは「はっきり言っておくが、あなたは、今夜鶏が鳴く前に、3 度わたしのことを知らないと言うだろう」と言われたのです。ペトロは、とんでもないと言わんばかりに、「たとえ、ご一緒に死なねばならなくなっても、あなたのことを知らないなどとは決して申しません」と誓って言ったのです。

人間の愛は、気まぐれなものであり、不確かなものです。あれほど誓って、命まで賭けて愛すると言い張ったのに、彼はその思いを貫き通すことが出来なかったのです。

ご承知のように、ペトロはその日の夜、イエスさまが言われた通り、3 度「イエスさまを知らない」と否み、心ならずも、イエスさまとの関係を否定してしまったのです。

イエスさまが捕らえられて、大祭司の邸宅に連れていかれた時のことです。ペトロは、密かにその中庭に忍び込んで、中の裁判の様子を伺おうとしたのです。そこまではよかったのですが、その中庭で、その屋敷の僕や女中さんたちが焚火をしているところに加わって、一緒に火にあたっていたとき、女中の一人から、「あなたもあのイエスと一緒にましたね」と言われると、彼は思わず「それは違う」と打消し、それがきっかけになり、「あの人の仲間でしょう」、「一緒にいるのを見たことがある」と言われて、「その人を知らない」と、結局 3 度もイエスさまとの関係を否定してしまったのです。その時、鶏が鳴き、主イエスが言われた通りになり、ペテロは外に飛び出して激しく泣いたのです。イエスさまの言われた通りになってしまったからです。イエスさまから愛されているのに、そのイエスさまの愛を裏切ることになってしまった、そのことにペトロは耐えられなかったのです。伝説によると、その後もペトロは、どこかで鶏が鳴

く度に、その夜の出来事を思い起こして、激しく泣いたと言われています。そんなペトロをイエスさまは、見放したり、見捨てたりなさらなかったのです。

復活されたイエスさまが、ペトロに「わたしを愛しているか」と問われたのも、そのようなペトロの心中を察してのことだと思います。ペトロの心の底には、<大切なイエスさまを裏切ってしまった。もう弟子と呼ばれる資格はない> そんな思いが重くのしかかっていたと思います。そんな思いから、ガリラヤの郷里に帰り、漁師の生活に逆戻りしようと考えていたのかもしれません。

ペトロは、「わたしを愛しているか」との主イエスの問いに、「はい」と答えつつ、「わたしがあなたを愛していることは、あなたがご存知です」と語らざるを得なかったのです。かつて大見得を切って、「みんながあなたにつまずいてもわたしはつまずきません」また、「死んでもあなたを知らないなどとは言いません」と言い切った自分を恥じ、しみじみと自分の弱さと罪を悔いたからです。

主イエスはそのようなペトロに、「わたしの小羊を飼いなさい」と言われたのです。イエスさまが大事に育んできた多くの迷える「小羊」たちを守り、養い育てる務めを託されたのです。ペトロにとって、これは思いがけないことであったと思います。

ところが、イエスさまの問いかけは、それで終わらず、さらに問われたのです。「ヨハネの子シモン、わたしを愛しているか」と。ペトロは同じように答えました。「はい、主よ、わたしがあなたを愛していることは、あなたがご存知です」と。すると主イエスはまた、「わたしの羊の世話をしなさい」と言われたのです。

そして、さらに主イエスは、もう一度「わたしを愛するか」と問われたのです。「愛しているか」という同じ問いを 3 度も主イエスから問われて、ペトロは「悲しくなった」とあります。同じ問を 3 度も繰り返して問われたら、だれでも、「信じてもらえないのか」と、悲しく思うでしょう。ペトロは答えました「主よ、あなたは何もかもご存知です。わたしがあなたを愛していることを、あなたはよく知っておられます」と。

イエスさまは、なぜ、「愛しているか」という同じ問を 3 度もペトロに問うたのでしょうか。ペテロを悲しませ、苦しめるためではもちろんありません。そんな嫌がらせを、イエスさまがするはずがありません。この 3 度の問いは、あのペトロの 3 度の「その人を知らない」というイエスさまとの関係を否定したことと深く関わっていると思われます。ペトロが不本意にも、「その人を知らない」と 3 度もイエスさまを否んでしまったその言葉を、イエスさまは、「わたしを愛するか」という 3 度の問いによって、新たに言い直すチャンスをお与えになったのです。

スポーツの世界でも、よく「敗者復活戦」というのがあります。失敗して一度敗北した選手やチームに、もう一度試合のチャンスを与えて、復活の機会を与えるという救済処置です。一度の失敗・敗北で切り捨てないのです。学生時代よく追試試験というのがあって、私もお世話になった方です。一度失敗して及第点を取れなくても、もう一度試験してもらえるのです。有難かったです。

「わたしを愛しているか」というイエスさまの 3 度の問いは、「その人を知らない」というペトロの 3 度の過ちを修正させ、主の弟子として復帰させるイエスさまの深い愛と配慮によるものであったのです。

「はい、主よ、わたしがあなたを愛していることは、あなたがご存知です」。イエスさまの問いかけに対するこのペトロの戸惑いながらの遠慮がちな答えに対して、イエスさまは「わたしの小羊を飼いなさい」、「わたしの羊の世話をしなさい」と、ペトロの新たな使命、使徒としての大切な役割を託されたのです。

このようにして、シモン・ペトロは、主イエス・キリストの愛と赦しによって、新たな命を与えられ、殉教の死に至るまで、忠実に主に従う歩みを全うすることが出来たのです。

私たちも、主に愛され導かれている者でありながら、しばしばイエスさまの愛を裏切り、イエスさまと関係のない生き方をしたり、言動によって、多くの過ちや失敗を犯している者です。しかし、イエスさまはどんなときにも、私たちを見放したり、見捨てたり、見下したりすることなく、いつも共にいてくださり、立ち帰るように声をかけ、招いておられるのです。イエスさまの十字架の死と復活は、何よりもその確かなしるしなのです。復活の主は、今も私たちと共におられて、「わたしを愛するか」と問うておられます。主イエスの真実な愛に応えて、私たちも真実な愛をもって、主に従い、主の愛しておられる小羊や羊たちに仕えて歩むものでありたいと願います。アーメン